

## 大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫

豊臣秀吉によって大友氏第22代の義統が改易された後の慶長6(1601)年、豊後府内には、徳川家臣の竹中重利が転封され、近世府内藩初代藩主となります。重利は、府内城の改修と、城下町や港を整備して現大分市中心部の原型をつくりました。その跡を継いで元和元(15)年に、2代藩主となった長男重義が引き起こしたのが、パウロ・ドス・サントス事件です。重義は、江戸幕府老中土井利勝の推挙で、寛永6(10)29(33)年の間、長崎奉行に就任します。その任中、東南アジアに2度にわたって幕府許可の朱印状不携帯の密貿易船を派遣していたのです。

### ナカヤ又右衛門

カオに逃れたとされます。寛永11(34)年に長崎に入港したマカオの商船から、そのサントスが日本人に宛てた書状2通が見つかりました。書状には、長崎奉行在任中の重義が、寛永7(30)年と翌年にマニラとシヤムに向けて、朱印状を持たない密貿易船を渡航させたこと。そして、その船を使ってマカオのサントスが、長崎の「ナカヤ又右衛門」にトンキン(ベトナム)の生糸と広東の織子(モノ)を売却していたことが記されています(岡美穂子「商人と宣教師 南蛮貿易の世界」)。

近年の研究で、「ナカヤ又右衛門」という人物が浮かび上がってきます。この人物について、は、サントスが追放される慶長19年以前から、長崎で旧知の仲であつたことが別の史料から明らかです。中でも、17世紀初頭に華南から東南アジア方面とを結ぶ貿易活動をしていた、この長崎商人「ナカヤ又右衛門」の姿は、16世紀末に明やカンボジアとの交易を手がけていた豊後豪商「仲屋」の、「寛永中に至

### 長崎奉行・竹中氏の私貿易を支援か

は、新たな統治者として府内に入つた藩主竹中氏と結ぶことで、同氏が長崎奉行に抜てきされた寛永6年以降に、重義の肝いりで長崎(恐らく豊後町)に進出。前代からの経験と人脈を通して、重義が策略するマニラ、シヤムとの私貿易(密貿易)活動を支援したものと推測されるのです。

(名古屋学院大学国際文化学部長・教授)

11月1回掲載



浄安寺境内にある竹中重利の墓(大分市)